

Title	近世経済史概論(野村兼太郎著, 同文館発行)
Sub Title	
Author	高木, 壽一(Takagi, Juichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.163(529)- 166(532)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て採集されし同種の遺物に、その數量を附加せしのみならず、更にその捜査範圍を擴大し、大型小型の各種打製石器より磨研石製品に亙り、蒙古新石器の特色定形を認定し、蒙古新石器時代に關する新知見を寄與し、併せて黒褐色粗質土器・縞目文灰白色粗質土器・黝青色席文砂質土器等の冑形・壺形・尖底形土器の併出に注目し、所謂蒙古細石器文化の時代が、上は黃河中原なる彩文土器の年代に併行し、下は西紀前第五世紀より西紀前後にかけ、スキート・シベリア式青銅器鐵器の文化が蒙古高原より支那北邊を蔽ふに至る頃まで存続せしものなるべきを推定してゐるのである。第二篇は所謂スキート・シベリア式青銅器に關する研究報告で、本書中最も興味あるまた最も重要な部分を成し、その紙數の如きも第一篇の六二頁第三篇の四〇頁なるに對して二〇五頁を占めてゐる。隨つて、その内容も亦最も豊富であり、その研究對象たる青銅器も尙に綏遠方面に於て兩君及び三上次男君が親ら購入蒐集せしものばかりでなく、また張家口に於て購入せしもの、及び北平に於て購入し目下東京及び京都兩帝國大學に所藏する遺品をも抱括し、その種類も銅斧・銅鑿・銅劍・刀子・銅鏃・鐵鏃等より甲冑・馬具・裝飾品・古錢・印章・鏡鑑・動物形品等の各種に亙つて居り、支那に於ける文化發達の由來についても、亦多大の示唆を與ふるものあるを感ずるのである。第三篇の支那北疆に於ける繩蓆文土器遺蹟とは、北平・懷來・宣化・張家口・綏遠・包頭・五原方面にて蒐集せし繩蓆文土器及びその遺蹟に關する研究報告で、この地方に於ける古代漢民族の文化に關する研究である。而して、それ等の各篇には鮮明にして豊富なる圖版を附し、かつ卷

末には英文の梗概を添へてゐる。たゞその體裁は、從來發刊されし「東方考古學叢刊」が、何れも大形なりしに對し、約半分の小形とし、前者を甲種(A Series)と名け、後者を乙種(B Series)と稱し、本書を以てその第一冊として居り、今後適宜兩様の體裁を以て出版することである。隨つて、その外觀の堂々たることはもとより前者に及ばないのであるけれども、その取扱に便なると、その價額の廉なるとは、却つて學界に裨益するところ大なるべきを思ふのである。

以上述べるところによりて、不完全ながら本書の内容價値の如何なるものなるか、略々之れを紹介したつもりである。たゞその推究論斷が果して盡く妥當であるか否かは、今俄かに斷言する能はざる箇所も見えないではないが、現在の東亞考古學界に於て、とにかく最新知識を抱含し、その研究報告の最高峯の一たるべきことは、疑ひなきところであらう。幸に亞細亞大陸に對する我が國力の進展も、今後益々著しきものがあり、隨つて、その研究探檢の便宜も亦愈々開かるべき機運に際し、將來に於ける斯學の發達も亦更に大いに刮目すべきものあるを、期待せざるを得ないのである。(定價拾圓)(橋本増吉)

近世經濟史概論(野村兼太郎著) 同文館發行

本書が、出版せられると、私は著者よりの寄贈を受け直ちに之を通讀する機會を得たことを感謝する。從來、近世經濟史を邦書を以て讀まうとすれば、先づ故瀧本博士或は本位田教授の著書を

探るほかはなかつた。茲に野村教授の新著によつて近世經濟史の研究上に一の大なる貢獻がなされたことを喜ぶものである。

本書に於ける敘述の概要を記して、其特徴の一斑を本誌の讀者に紹介する。

著者は文化史の一部としての經濟史、即ち全般的な經濟的發展の敘述を問題とする。經濟生活を、靜態的には物的所有關係、動態的には物的給付關係の二個の方面から觀察する。物的所有關係が如何に規定さるゝかに依て物的給付關係が相異なつて來る。しかし前者は後者によつて制約される。此兩者は單なる關係に止まらず、より高き組織即ち經濟組織及び社會組織を形成する。經濟史は此物的所有關係と物的給付關係とが基礎となつて構成された各時代の生産組織を對象とする。此二關係の調和から生ずる經濟組織の發展を中心として全社會組織の必然的變化を實證的に説明せんとするものである。之が著者の序論第一節の所論である。

其第三節末に於て「近世の經濟組織が貨幣を中心として、貨幣的利得を目的とする投資によつて運行されるが故に一般にこれを資本主義制度と呼ぶに至つた。しかし近世の經濟的發展はこの制度を完成すると共に、又その内容を漸次に必然的變化せしめつゝある。……近世經濟史はこの變遷を明瞭ならしめることをその任務とする。」と述べて近世經濟史概論の主旨を指示して居る。

近世の基本社會の形態を國民的國家とし、其國家形態を形成せしめたる根本原因として其當時の經濟を説明する。其第一には貨幣經濟の確立、次いで近世都市の發達、マアカンチリズム、商業資本の發展、投機及株式組織の發展が敘述される。新貿易路の發

見以後、第十八世紀末までの經濟的變化を考察し、其時期の最も著しい現象を市場の擴大とする市場の擴大、商業に對する需要増加とともに從來の生産組織は破壊され新しき組織へと進展せざるを得ない。第三章は産業革命を殊に英國について略述し、斯る生産組織の大變化に際して如何なる思想が一般に認めらるゝに到つたか、即ち其當時の理念として自由主義を取扱ふ。英國に先づ生れた資本主義制度は自由競争を原則とし、其生産力の増進が新しく展開せる世界經濟機構に如何なる變化を與へたか。茲に英國と他の國々とを相關關係に於て觀察する。其は人口及び移民問題、市場の擴大、交通機關の發達、産業恐慌、更に後進資本主義國への影響等の諸問題に關聯して述べられる。後進國が農業國より工業國に轉ずるに當つて、最も重要な問題は資本の問題であり、從て先づ後進國は金融制度の確立を必要とする。資本主義生産組織を完成するや、最も重要な問題となつたのは市場の問題である。資本主義の發達はそれ自身の生産力の増大と共に其形態を變化せざるを得ない。資本主義が獨占的形態を採らざるを得なかつた理由は資本主義そのものに内在する。第四章に於て自由主義の没落を説明し、獨占資本主義。カルテル、トラスト等の獨占企業形態及び金融資本の發達。世界的恐慌への發展を述べる。次いで世界大戰と其影響を英米獨佛の資本主義國と露西亞について觀察する。最後に、一九三〇年の世界恐慌が如何にして惹起されたかの問題に答へることはある意味で從來の記述の總括とも云へる。自由主義を原則とする諸制度が漸次に放棄される一の又主たる契機となつて居るからである。世界經濟恐慌を分析し、經濟ブロック

の形成を説明する。大戰後一方に國民主義的傾向が盛であると共に、經濟組織の世界化は著しい現象となりつゝある。少くとも現在には未だ國民經濟の時代である。諸國民經濟はそれぞれの政治形態を通じて世界經濟の一環をなして居るにすぎない。故に顧慮せられるのは先づ國民經濟であつて世界經濟全體ではない。……現在の世界經濟は著しく複雑となり、その國際的關聯には殆ど何等の統制をも存在して居ないと云つてよい……。經濟組織の發展は矛盾を克服することによつてのみ可能となる。……完全な組織的な世界經濟を構成するに至るまでには未だ多くの努力と多くの時間と、さらに多くの犠牲を必要とするであらう、と云ふ言を以て本書を終つて居る。

以上が、近世經濟史概論三六七頁に亙る所説の要旨である。之によつて讀者は其研究對象の範圍が極めて廣きに亙り、且つ興味深き題目を包含することを知られるであらう。私は近世經濟史に少しく興味を持つ者として、本書を通讀するに際して感想なきを得なかつた。研究對象を斯くの如く探つて、近世經濟社會の發展を實證的に解明して行くと云ふことは研究者として極めて愉快なる勞作であらう。經濟史學界も亦、之を待望するであらう。本書を其最も喜ばるべき著作として擧示することが出来る。其故に私は野村教授の新著を最近の好著として經濟史研究者に推薦する。此書が廣く一般讀者に讀まれることは近世經濟史の知識を著しく高めるからである。

私は本書を斯く一般に推稱するが、又其故に著者に對する希望をも感ずる。それは本書が、時に含蓄を残して書かれて居るやう

書 評

である。其ために多くの示唆を含むことにもなるが、恐らく著者の聽講者には平明な説明があつても、一般讀者には其機會がない。廣く一般讀者の經濟史的啓蒙のために説明なくしても疑問を残す虞なきに努められたい。恐らく本書は幾度か版を重ねるであらうから、其機會に當つて其勞を求めめるものである。同一の主旨に於て、参考書目について希望を述べたい。卷末の参考文献は研究者にとつて多くの便宜を與へ、又研究の刺戟を與へる。著者が序文にも云はれる通りに決して包括的であることを期して居られたい。しかし本文の敘述と關聯し又参考資料となるべき、代表的の文獻は省略しない方がよいと思ふ。又参考文献のうち、確なるものであれば其邦譯或は英譯などがあるときはそれを附記された方が後進の研究者には非常な便宜となる。著者は當然既に氣付いて苦笑を以て迎へるであらうが、代表的著作で脱落して居ると思ふもの二三を例示する。参考文献二頁金融關係に *Andréas* 英蘭銀行史が無く第四章企業集中に於て *Tejeda* を擧げて *Rieser* が落ちて居る。帝國主義について、*ホブソン* 及び *レニン* の帝國主義論 *ヒルファディング* 金融資本論等の基本的著作が落ちて居る。また世界大戰後の資本主義國及びソヴェートの經濟的發展に關する参考文献を多くすることは、一般讀者が近世經濟史的發展の最近及び現段階を理解することを深めるために必要であるやうに感じ、著者に希望を提出するのである。

要するに私は、本書の如く近世經濟社會の歴史的發展を敘述し其理解を深める所の勞作は、經濟史研究者のみならず、廣く一般讀書家によつて讀まれ、其經濟史的知識を啓發されることを期待

して已まないものである。恐らく本書は幾度か版を重ね、一層充實完成されて近世經濟史概論の最高代表作となるであらう。私は其を期待し其前途をも祝福したい。(高木壽一)

左傳の思想史的研究

(津田左右吉著)
東洋文庫論叢第二十二

周知の如く左傳は支那の所謂古典中最も浩瀚な文獻であり、従つてその眞偽と製作年代の問題は支那古代史に於ける最も重要な問題の一として、嘗て主として曆法上から、飯島・新城・橋本の三者宿の間に活潑な論争が行はれて居り、又海外にあつては、主として康有爲の劉歆偽作説を祖述したフランケと、言語學上の見地から之に反對したカールグレン、左傳の成立を分析してその所見を東大で講演しベルギーの支那學雜誌に發表されたアンリマスベロとがあつた。然るに最近著者は左傳中の各種の説話を思想史的に検討することにより、此の問題に新たなる光明を投ぜんとされたのであり、東洋文庫論叢第二十二として四六倍版七三七頁の堂々たる大冊として、その意見を發表されたのが本書である。

本書は先づ序説として、左傳に關する文獻上の記載を批判することによつてその述作の時代を考へ、魯の恭王の古文發見譚や、漢書儒林傳や劉向の別錄からとつたと云ふ左傳の學統の信じ難いことを論じ、左傳に關する確實なる文獻は成帝の時までしか遡り得ず、不明の作者の手になる稿本に、尹咸・翟方進及び劉歆の手が漸次加へられたものゝやうであるとし、左傳の作者と傳へられる左丘明は、國語の作者として傳へられた左丘が明を失したと云ふ

話から、左傳の事實上の作者によつてつくられたものであり、史記の十二諸侯年表に見える左丘明と左氏春秋の話や、論語公冶長篇の左丘明に關する孔子の言は何れも前漢末の補入なりとし、次に春秋の解釋法の古來の變遷として孟子・荀子・公羊傳・穀梁傳・董仲舒・劉向・劉歆等の考を記し、左傳が何れの段階にあるかを見、事件を詳記する左傳の特色が、「義」を説き褒貶譏刺を説いてきた戰國から史記篇述の頃までの考方と違つてゐることを指摘してゐる。

次いで本論に入つて左傳の特色をなす多くの説話(五霸に關するもの、晉楚の抗爭に關するもの、孔子及子産に關するもの、古帝王及諸侯の祖先に關する説話、儒教思想によつて作られた説話、卜筮及び占星術に關する説話)を一々、春秋の經、孟子、荀子、韓非子、呂氏春秋、公羊傳、韓詩外傳、淮南子、史記、漢書、管子、說苑、新序、現存の國語などに見える同じ主題の説話と比較し、また戰國時代から前漢末までの政治史及び思想史上の事實と對照することによつて、其の變化と發展との徑路を考へ、左傳がその間において如何なる歴史的地位にあるかを見、これを史記以後と斷じ、次に左傳の説話と、それによつて構成されてゐる左傳の全體のくみだてに現れてゐる左傳の思想(「霸者觀」、「霸者的戰國的精神と儒教思想との對立及び抱合」、「春秋の精神と左傳の思想との一致及び矛盾」、「禮に關する二面の思想」、「呪術祭祀と儒教道德との背反及び調和」、「道德觀及び歴史觀」と、さういふ思想を生み出した政治的社會的狀態、それが形成せられた徑路、及び其の歴史的地位とを考へ、戰國以來の思想も存するが、多くは